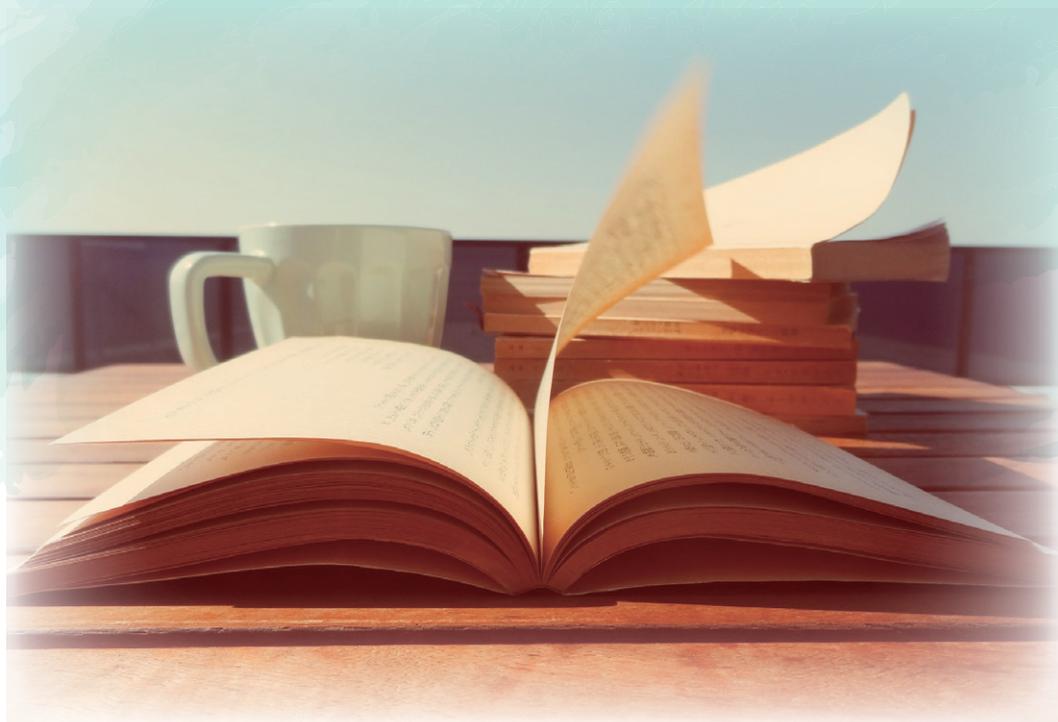


令和7年度
第75回高知県芸術祭

第54回

高知県文芸賞
入選作品集



高知県芸術祭執行委員会

令和7年度
第75回高知県芸術祭

第54回

高知県文芸賞
入選作品集



高知県芸術祭執行委員会

もくじ

〔短編小説〕

高知県文芸賞

美彌子の春

研裕太

高知県文芸奨励賞

アイスクリンはいつだって尊い

みやぎ えみ

カタツムリとナメクジ

山本 勇 弥

佳

誘い 灯

中山 道 雄

〔詩〕

高知県文芸賞

骨

甫木 恵 美

高知県文芸奨励賞

子の宮

町野 紀代美 猫

父の涙

青野 紀代美

忠弓

濱口 陽 仁

忠十

山田 草 花

八作

西原 時 子

佳

川漁師

山崎 詩 織

川ツオの詩

村西 和 貴

かけがえない存在

山下 西 貴

いっつ

山 下 和 貴

幸せの種を蒔いた

栗山 文 子

46

44

42

39

36

33

30

28

26

23

21

16

11

6

1

〔短歌〕

高知県文芸賞……………尾崎清……………49

高知県文芸奨励賞……………中平千友・徳永逸夫・武山ななみ……………49

松岡恵子・小野都子……………

〔俳句〕

高知県文芸賞……………岡林知世子・澤村正彦・大野充彦……………池裕美……………53

高知県文芸奨励賞……………和田和子・吉川優羽……………53

尾崎光洋・浜田博子・川戸右京
安西佐和・片岡幸枝・松岡恵子
谷三喜・谷岡永太・矢野虹恋
和田縞都……………

〔川柳〕

高知県文芸賞……………高橋敦子・野村宏・富士田三郎……………渡邊ゆかり……………59

高知県文芸奨励賞……………大野充彦・近藤真奈……………59

ますだじゅんこ・明神永子・大野早苗
熊谷敏郎・西崎直子・岡林裕子
森下菊・徳永逸夫・木村結人
藤田華帆……………

〔審査評〕

〔作品募集要項〕

……………70
……………65

短
編
小
說

美彌子の春

南国市 研 裕 太

男が、ただひたすらにこちらを見つめている。目を見開き、口を開け、首の角度を様々に変えながら。その粘ついた、生温い吐息が吹き掛かりそうな距離で、ただこちらを見つめている。「なんと美しい」と声にならぬ声を零しながら。過ぎゆく時間も忘れてじつとりと舐め回すように、ただこちらを見つめている。

その男の浅黒い、濁った顔をはじき返し、時には包み込んでしまうほどに光を放つ、このどこまでも白い肌も、眼球の煌めきも、紅の鮮やかさも、均等に結い上げた艶やかな髪も、豪華な扇も、小指の爪の絶妙な丸みに至るまでも、全てが完璧な計算のもとに生み出されている私は、いつも、何十年も、こうして賞賛と嘆息を浴びてきた。

随分と前に分かったことだが、どうやら、私は生涯——といってもその終わりは、どこまで行っても果ての無いように思われるが——この、妙につやつやとなまめかしく照り映える四方の囲いからは出ることができないようである。それどころか、身動き一つ、瞬き一つ許されてはいない。ただ時の流れを止めたかの如く、薄目を開き、微笑をたたえ、朝の炊事場の慌ただしさも、昼の居間の賑やかさも、夜の庭の静寂も問わず、ただそこに居ることだけが求められる。変わることも老いることも許されない、ただ最高級に美しいままでいるのが、私「美彌子」の役目である。

高名な人形師達による京人形の最高傑作。そういった代物を実際にすることができる人間はさして多くない。上流階級の中でもごく一部の人間が住む邸宅の片隅に、鑑賞するために、あるいはその一族の力を誇示するために安置される。

実際に見た者でも、触れることは許されない。万が一壊れては大ごとだから、慎重に、密やかに、塵一つ纏わぬように、硝子板の中でのみ管理され

る。私は、硝子板を隔てた微かな距離を保って、数多くの人間の眼差しと対峙する。ただ、見つめられ続けるのだ。そうしているうちに、人間には様々な顔があり、それぞれの顔はまた様々な表情で世界を見つめていることを知る。美そのものゝ当てられ、酔いが回ったような恍惚とした顔、価値を見定めるような顰め面、満足気なしたり顔。それぞれが思い思いの不完全な表情で、この完璧でただひとつしかない顔を見つめる。私は視線に絡めとられる。独りであることを利那思う。が、淋しさも苦しさも、そこにはない。

人間の顔を見るたび、あの感覚器官の集合体が、次第に何か間の抜けた、ただの玩具であるかのように見えてくる。そのたびに私は、私と人間のどちらが玩具であるのか、わからなくなる。都度表情や言葉を変えながら生きる、丁度からくり仕掛けの様なその物体が、極めて滑稽なものに思えてきて、さぞ大変な事だろうと同情すら憶える始末であった。

私は長い年月をかけて、いくつかの家を渡り歩

いた。持ち主が亡くなるたびに、私は遺産の目玉として扱われた。

その出逢いは持ち主が移り変わった次の年の春の日だった。晴れた空のもとで庭先の桜が盛りを迎え、雲雀が二、三羽軽やかに歌い上げながら飛び交っていた。陽光は障子を通り抜け、幾本かの淡い筋を描きながら柔らかく居間に差し込んで、私の右側を仄かに照らしていた。

足音。聞き馴染みのない静かな足取り。

ふと前に、初老の男が現れた。彼は貴族らしくらぬ、つまり、あの階級独特の、生まれの良さと教養とだけを誇っている醜さのない、慎ましやかな男であった。

彼を私のもとへ案内してきた主人は、私の話を他人に聞かせる遊びを、一等好む男であった。これまでにも、何度もそういう男のもとに置かれてきたから、辟易する気すらも起こらなかった。人形師の名、製作年代、歴代の所有者、その他の私の価値らしきものについてぐずぐずと、得意気に語っている。彼は既に私も、客人も見えていない。

これまでの主人も皆、同じだった。同じことを、同じようにしか語れない代物に、価値などあるはずがないというのに。

ふと、主人の声がびたりと止んだ。その客人が、主人の少し横に腰を屈め、控えめに手で制していた。私を三步ほど離れたところから見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「ありがとうございます。もう、結構ですよ。これは宝でございますね。間違いない。よく、わかります。ただ、そんな事ばかりでは、この御方も居心地が悪そうだ。ねえ。貴方」

話しかけられたのは、初めてだった。まるで私が当然返事をすると思ひ込んでいるかのような、落ち着き払った、それでいてどこか無邪気な話ぶりだった。不思議な人だと思った。私はただ、人形師達の手によって、それぞれに分業され、顔の、髪の毛の、手足の、道具の、着付けの、職人たちの技を寄り集めて作られた、人の形をまねただけの粘土細工であるのに。人形が人間と会話などできない事は、実のところ百も承知だろうに。その上

で、彼がただ独り言を話しているだけなのか、本当に人形と会話をしたがつているのか、やはりどうしても掴むことができなかった。ふと、少しばかり雲が流れて日差しが強まったのか、暖かくなった。庭の緑は、その麗らかな春の陽に幾らか濃く色付いたようだった。

客人は家に顔を出す度に、私に語りかけた。

「暖かいですね。気持ちがいいでしょう」

「ここは日陰になって涼しいですね。貴方は夏用の薄衣が着られないから、よかった」

「長い雨ですね。この調子だと、せっかく色づいた紅葉が散ってしまうでしょうか」

「一段と冷えますね。貴方の着物は暖かそうだ。風邪を引く心配はありませんね」

いつも、そうして話しかけてくれた。しかし、そこには決してもの悲しさも押し付けがましきもない、のんびりと返事を待つともなく待っているような静けさが漂っていた。彼はきつと、死者にもこうして話しかけるはずだ。その確信は、ひどく私を安心させた。それでも私は、私が彼の

言葉を受け取っていると、彼に知らせたかった。こんなにも美しい彼の言葉が何ら意味をもち得ず、ただ虚空を漂う他ないということが、口惜しくてならなかった。次第に私は、奥ゆかしさを追求しただけの、この単調な顔ではなく、もつと、もつと色々な表情を、彼にだけは見てもらいたいと思うようになった。この小さな小さな口元の微笑みも、この薄く開いて伏し続けている目も、なんと不気味なことか。このままで居れば、彼にも勘付かれてしまうのではないだろうか。彼が、今唐突に童心を取り戻したとしたら、人ではないものすべてに怯える、あの幼児特有の眼から見える景色を思い出したとしたら、彼はもう私の前に二度と姿を表してくれないのではないか。そんなことにならぬ、私の心は打ち震えていた。

私は既に、一切のことを、それもかなり前から了解していたはずであった。私はどこまでも一体の人形であり、決して一人にはなれないということ。その淡い霞の様な、しかしすぐ傍に確かに在る絶望を、私はいつしか幻だと決め込んでいた。

彼は、この私にこそ話しかけるのであって、この私以外の私になることは、それ自体が異常な存在になることに等しいということも、やはりわかっていた。

鏡が欲しかった。私は今どんな顔をしているのだろう。髪の毛の崩れも化粧の崩れも、決して在り得ないはずなのに、どうにも堪らなく、鏡が欲しかった。彼の眼に映った私は、醜く彼の瞳を穢してしまっていないだろうか。そんな私の静かなよろめきを露とも知らず、今日も彼は私の前に少し屈んで、一つしかない表情に、様々な表情で話しかけた。

それから四度の春が来て、主人は死んだ。私の前で長い時間交わされた従者達の会話から、私はあの客人のものになることを知った。主人が、是非にということで遺言したそうである。熱を帯びた何かが、一拳にこの冷たい体へなだれ込んでくるようだった。彼と毎日顔を合わせて、あの優しく低い声を、一人で聴くことができる。それなのに私の心には、その澄んだ喜びを帳消しにする、

ただ一点の濁りが生じた。それはじわじわと辺りに浸潤していき、滲んで汚らしい模様を描いた。

この固く閉ざされた顔は、いつの日か崩れてしまわないだろうか？ 彼の言葉が、私の恋が、自然の摂理を歪めて、禁忌を犯してしまわないだろうか？

穏やかな朝だった。空は広く晴れ渡り、風も辺りを包むかのように流れていたのに、ふと、家中が何やら騒がしく、ただ事ではない様子で殺気が立っているのを感じた。遠くで、何か唸り声の様な音が聞こえる。家中の人が口々に大声で叫び、逃げ惑う音が聞こえる。

火事であった。

不思議と、恐ろしいとは感じなかった。むしろ、思ってもみない幸運だったと、心から安堵した。やっと楽になれるのだ。私の心持は、意味のない奇声を発しながらどたばたと無様に走り回る人の姿の、およそ対極に位置していた。私は火に溶け、やがてすぐ壊れるであろう。その運命は、意外にも人のそれに似ている。もう、壊れてしまっ

て構わない。もし、彼の元へ行ってしまったら、私の顔が、表情が、先に綻びてしまうから。きつと、私の器が、私のうちに沸き立つこの欲望に耐えられなくなってしまうから。慈悲深い炎と私自身の欲に焼け焦げて崩れた私を、彼は拾ってくれるだろうか。そんなことをちらと考えてみたもの、もう、どちらでも良いような気がした。音が近づいてくる。硝子がとろける。火の尾が私の頬をさりと撫ぜる。暖かかった。彼が、初めて、掌でそつと触れてくれたような気がした。

私はいつものように、薄目を伏し、微笑みをたたえたままに、彼に見初められたあの姿のままに、柔らかな火に包まれた。

アイスクリンはいつだつて尊い

四万十市 みやざき えみ

「ビッグな映画を撮るまで帰らんけん」

父はそう言つて、家を出た。

「おうの」

母はそう言つた。当時九歳の私は、「おうの」
つて英語のオーノー？ と、のん気なもんだつ
た。

私は今、二十六歳。父はまだ、帰らない。

私は昨年、小規模な映画のコンテストで大賞を
とつた。地元に住む人達の日常を追つたドキュメ
ンタリー映画だ。地方新聞に記事が載つた事もあ
り、段々と県内の図書館やミニシアターで上映さ
せてもらう機会が増えた。映画を撮る事は父に向
けての反抗では決してない。私が自分で決めた道

だ。

次作に向け構想を練っている。題材は未定だが
地元で撮影するという点に変更はない。

私の地元は、所謂「地方」と呼ばれる場所で、
山と川と海とが大半を占める。人と人の距離が近
く、人と動物も近い。

私はここが、苦手だった。どこに行つても知り
合いがいて、男子と下校すればすぐ噂的にな
る。窮屈さと退屈さに辛抱できず、高校を卒業す
ると即都心へと引越し、映像を学ぶ道へ進ん
だ。アウトドアをしない私には自然は娯楽になら
ず、映画やアートをひたすら求めた。私が中学生
の頃まではまだ、町に映画館があった。けれど今
は車で三時間近く走らなければ映画の一本も見れ
ない。

反面、手軽に自宅で映画を楽しめるようになって
た。眠りにつく数分前の映画の心地よさを知って
から、私も月額料金でお世話になっている。け
ど、やはり映画館で観たい。だって、落ち込んだ
時に見るフランスコメディは最高にクールで泣け

るから。オールナイトの明け方は見る景色が変わるから。映画は誰に対しても平等だ。だから私は映画を撮るのだと思う。映画は日常のどんなシーンであれ、その人の傍で何も言わずに寄りそうだけだ。

父の映画を見た事はない。母が父のしている事に興味を示さなかった事も大きいだろうし、父は大体家におらず、いると思えばほぼ寝ていたように思う。私達を解せない人もいただろうが、母は常に愉快で遅しかった。

賞をいただいた事をきっかけに、私は住いを地元へと移した。無論、映画でご飯は食べられない。リモートで会社員を続けながらの生活だ。住居は実家の隣町で、週末はサーファー達で賑わう海の近い場所にある。

母は、腰を痛めた事もあり長年勤めた福祉施設を退職し、無理のない程度で病院の清掃をしながら趣味の畑作業に勤しんでいる。娘のする事も興味がないようで、私の事を何か聞かれても、「ようわからん言うちよる」と、言っていた。そ

れぐらいで丁度いい。

物事を考える時、私はカフェを利用する。家にいると集中できないタイプなのだ。こっちに帰ってそれができるのか不安要素であったので（なんとなく個人経営の喫茶店って長時間居座りづらい）、全国チェーンの喫茶店ができていたのには拍手をして喜んだ。

アイスコーヒーを注文し、タブレットを置いてガラス越しに外を眺める。暑さで道路はゆらゆらと揺れ、堤防を刈る除草作業員に、涼しくしてすみませんと言いたくなる。ほやけた足元の中で遠く、制服を着た小学生と日傘を差した喪服のお母さんが並んで歩いていた。私が幼い頃にはなかった小学生の制服姿と、背筋の伸びた細いお母さんの姿は不謹慎だがとても絵になっていた。

「おい」

頭の斜め上から声がし、親子を見てぼうっとしていた頭が冴えた。

「おい」

と、再び言ったその男、それは父だった。

私は思考を失った。目の前にいる、白髪交じりの長い髪と長い髭の、すえた臭いを放つ男をただ、じっと見た。

「おいあんた、俺を撮れ」

その男はそう言い、運ばれてきたアイスコーヒーに喉を鳴らした。

父は、何故かうちに居座った。一刻も早く母へ連絡すべきなのだろうが、私はできなかつた。だつてこんなの、現実的じゃなさすぎる。私は何度もため息をついた。仕事も手につかず、まさに「ずつな」かつた。父は、優雅に海へと散歩に出かけ、旅先でインド人に貰ったという胡散臭いコーヒーマイルで豆をゆつくり挽いた。その香りがいい事も余計に私の心を荒ぶらせた。

「川行くけん、車出してや」

木のテーブルへ当たり前のように座った父が当たり前前みたいに言った。

私は黙って車の鍵を渡した。そしてシネマカメ

ラを手に乗へと乗りこんだ。

すえた臭いは無くなったものの、長い髪と髭の男が運転する姿はモニター越しでもだいたいぶシユールに映る。

「あんた」

「あんたって言うな。名前忘れた？」

「サトコは、今、俺を撮りようか」

「……」

「それでええ」

何がだ。そう、映画になるかはわからないけれど、この非現実的な状況を私は撮らずにはいられなかつた。

川べりの少し歪な石に座り、父は川を眺める。暫くそれを撮るも一向に動きはなく、私は平たい小石を川に向けてぶん投げた。石はびよんぴよん跳ね、計五回の激闘を見せ沈んだ。

「うまいやん」

父はそう言い、立ち上がった。

「あいてて、ケツが痛え」

そら、あんな形の石に座るから。と、突っ込む

ことはせず、横目でお尻をさする父を見た。

「おりゃっ」

と、投げた父の石はだいぶ手前でぼちゅんと音を立て、私の顔に水をまき散らして消えた。

「すまんの」

半笑いで父は言った。

「下手くそ」

無表情で私は言った。

その後もカメラに映る父の投げた石が、熾烈な争いを見せる事はなかった。

「アイス食おうや」

道端のアイスクリンのパラソルを見た父が車を停めた。

「サト、好きやけん」

いつの頃の話だろう。アイスクリンなんて久しく食べてないけれど。ガンガンにクーラーを効かせても、アイスは無情にも溶けてゆく。サイドミラーで見るとおばあちゃんは笑顔でアイスを盛っている。どんどんアイスは溶ける。カメラを置き、手にまとわりつくアイスクリンを必死で拭いた。

「はよ食え」

父の大きな口は、すでにコーンまで達していた。母に似た小さい口では、なかなかコーンに達しない。

「サトと母さん、食うの下手っぴやけん」

私の体は、ぴたりと止まった。

「あんた」

「あんた言うなや」

「お父さんなんて言うわけないやろ。あんた、あんたが母さんの事を口にするなや。いや、私のことも、口にするな！」

私のアイスクリンは手をつたい、足を冷たく浸す。勿体無い、ごめんなさい。おばあちゃんは揺れるアスファルトの中にいる。喪服のお母さんと子供、あの日、涼しい部屋でゆっくり眠れただろうか。

父は何も言わず、車を走らせた。父は母の所へは帰れない。だってビッグな映画、撮ってないから。

「俺を負け犬と思うかえ」

そんな映画みたいな事を言い、父はコーヒーを淹れた。相変わらず、腹が立つ程いい香りがしている。

「俺は、世界中の人に自分の映画を見せたい。世界中の人に会う為に旅へ出た。作品は作ったけど、売れなかった。食中毒で死にそうになった事も、金をすられて泣いた事も、金持ちのインド人が突然コーヒーマイルをくれた事も、面白いやろ、でも、売れなかった。サトの映画、見たよ。よかった、感動した。田舎のただの風景が一瞬で変わった。俺はここで、それを撮れなかった」

私はコーヒーの湯気を吸い、言った。

「ここは田舎やけど、人がおる。動物も魚も鳥も。山は緑とかピンクで、川と海は緑とか青で、空は時々灰色で、人が船に乗れば波が揺らいで、鉄砲を撃てば響いて、夜は暗くて月が強い。人はよう動いて、一日がゆっくり流れる。それだけで、映画なんだよ」

手の中のゆらりと出る湯気を、私達は向かい

合って、見つめた。

父を映画にすることはなかった。けれどいつか、葬式にでも流してやろうかと思っている。

父の姿を見た母は、

「おうの」

とだけ言い放ち、くるりと背を向け畑へ去った。その光景を撮らなかつた事は、私の一生の後悔となるだろう。

父の滑稽な水切り姿と並べ、是非、世界へ見せてやりたかつたものだ。

カタツムリとナメクジ

高岡郡佐川町 山本 勇 弥

彼の背中には生まれつき殻があった。

殻は首の付け根より少し下から皮膚を突き破って生えていた。形はカタツムリの殻に似ているが、カタツムリのように彼の身体を覆い包めるほど大きくはない。生まれた時はおみ殻程度のサイズだったそうだが、彼が小学生に上がる頃にはピーナツの殻ほどの大きさに成長していた。

私と彼はいわゆる幼馴染で、親同士も仲が良かったため、幼いころからよく一緒に遊んだ。殻にも何度か触らせてもらったことがあるが、乳白色の表面はつるりとしていて固く、指先でつくとカツカツと乾いた音がした。

「そのカラってさ、とらないの？」

二人とも小学生だったある日、私は彼に尋ねてみた。その日は休日で、彼の部屋で一緒にテレビ

ゲームをしていたのだが、ふとした拍子に彼が背を向け、Tシャツの首元がぼこりと膨らんでいるのが目に映った。見慣れた光景のはずが、その時は妙に気になったのだ。

私の言葉に彼は振り向いて、目を瞬かせた。

「とらないよ」

「ねるときとか、ジャマじゃない？」

「ジャマじゃないし、ベンリだよ。ねるとき」

「ベンリ？」

私の疑問に彼は少し黙って、何か考えるそぶりをしてから、ずいところらに身を寄せた。そうして小さな声で、

「これ、ヒミツなんだ。だれにも言わない？」

彼がそんなことを言うのは初めてだったので、私は多少面食らいつつ、「うん」と頷いた。彼はにんまり笑うと、再び私に背を向け、肩越しに殻のある辺りを指さして、こう言った。

「このカラ、中に入れるんだ」

Tシャツの膨らんでいる部分を眺めながら、私はその言葉の意味をしばらく考えた。目の前の殻

は明らかに人間が収納できる大きさではない。

「どうやって？」

彼がまたこちらに向き直る。

「目をとじて、カラの中に入ろうと思ったら、入れる」

「中はどうなってるの？」

「まっくらで、すごく、しずかだよ」

なるほど確かに、それは寝るときに便利だろうな、と私は思った。

「いま、ここでも入れる？」

「入れるよ。見てて」

彼が座ったまま目を閉じ、そうして動かなくなつた。声をかけても肩をついても、微動だにせず、何か『糸が切れた』かのような雰囲気があつた。

しばらくして彼が目を開けた。

「こんなかんじ」

「……ほおー」

私が感嘆の声を上げると、彼はまたにんまりと笑つた。

中学校に上がると、彼は目を閉じなくても殻の中に入れるようになっていた。全校集会で校長が話している時や、ウマの合わないクラスメイトの相手をしている時など、私には彼が殻にこもっている場面が、何となく分かつた。

彼の背に殻があることは周知の事実であり、また彼の言動や動作が比較的のんびりしていたこともあつてか、彼は一部の口の悪い者から『カタツムリ』と呼ばれていた。彼自身もそれを知っていたが、否定や言い返したりはせず、むしろ「好きだし、カタツムリ」などと肯定さえしていた。ちなみに、よく彼と一緒にいた私は『ナメクジ』であるそうだった。

一度、私と彼の二人でいわゆる学級裁判のやり玉に挙げられたことがある。その日、担任が不在の際にクラスメイトの一人が教室を抜け出し、クラスメイトたちが校内中を探し回ったのだが、その際私と彼だけが搜索に参加せず教室に残っていたから、というのが理由だった。

当初、私も他の者たちと一緒に探しに行こうと

していたのだが、ふと、彼が一人自分の席に座ったまま動かずいることに気が付いた。さらに皆が出て行ったあと、彼は机から朝読書用の本を取りだすと、開いて読み始めた。

「行かないのか」

訊くと、彼は本から顔を上げて、

「誰だって、たまには一人になりたいでしょ」

と言った。それが彼自身ではなく、教室を飛び出した生徒のことを言っているのだと気づくまで少し時間がかかった。なるほど確かにそれもそうかと納得した私は彼と一緒に教室に残ることにしたのだが、結果としてそれが他のクラスメイトの颯爽を買ってしまった、帰りのホームルームで二人とも謝罪するはめになった。頭を下げながら、もちろん彼は自分の殻に引きこもっていた。

「お前が俺より先に死んだらさ、その背中の殻、俺にくれよ」

その日の放課後、私が八つ当たり気味に放った冗談に対して、彼は少し黙って、何か考えるそぶりをしてから、「分かった」と言った。

「でも、そうすると、君は『ナメクジ』じゃなくて、『ヤドカリ』になるかも」

意味が分からず何も言えずにいると、彼はそんな私を見て「冗談だよ」とにんまり笑った。

中学校を卒業後、私たちは別々の高校に進学した。初めの頃はよく連絡を取り合い、休みの日は会って遊んだりもしていたが、時が経つ内に会う頻度は徐々に減っていった。大学生になった頃には、年に一度か二度、帰省の際に予定が合えば顔を見せ合う程度となり、モラトリアムも終わり互いに社会人として忙しくなつてからは、それも無くなった。

彼と再会したのは、互いに三十歳を過ぎた頃だった。

その年の暮れ、私は実家に帰っていたのだが、私の帰省を知った彼の母親が訪ねてきたのだった。

彼女は私に、息子と会って話をしてあげてほしい、と言った。話を聞けば、彼は半年ほど前にそれまで勤めていた会社を辞め、今は実家の自室か

らほとんど出てこなくなったらしい。仕事を辞めた理由等は教えてくれず、これからどうするのか訊いても「大丈夫だから」と返すだけだそう。

少し迷ったが、私は彼に会いに行くことにした。会ってどうするかは考えていなかった。寒いけど近所だしまあいいくらいの感覚で、付け加えるなら、昔カタツムリとナメタジだったよしみだ。

彼の家に上がるのも随分久しぶりだった。

部屋の前に立ちドアをノックし声を掛けたが、返事は無かった、カギは掛かっていなかったのだ、私はそのままドアを開けた。

カーテンを閉め切った薄暗い部屋の中で、彼は自室のベッドにもたれかかって目を閉じていた。

何年も会ってはいなかったが、彼が寝ているわけではなく、完全に殻に引きこもっているのだということは、すぐに分かった。

不安げな母親に、ここで少し待ってみると告げた。彼女が退室すると、私は部屋の隅に昔遊んだテレビゲーム機を見つけ、勝手に電源を入れて、

遊び始めた。一面から始め、記憶をたどりながら進める。昔苦戦したステージも今なら楽にクリアすることができた。

そうして、三面ほど遊んだ頃、背後で彼が動く気配がした。しかし言葉は無く、私も振り返りはずにゲームを進めた。

しばらくの間、薄暗い部屋はテレビゲームの音と光だけが飛び回っていた。

その内、後半の面に入ったところでさすがに残機を使い果たし、ゲームオーバーとなった。

「少し手前に、隠しブロックあったのに」

後ろから声があった。振り返ると、ベッドにもたれていた彼が身体を起こしていた。

「そうだった。忘れてたわ」

「君さ、昔もよくそこで落ちてなかった？」

「そういや、二人プレイしてた時も、ここで死んで、ケンカになったっけ」

「そうだった、そうだった。喧嘩は、あれ一度だったね」

それから二人で話をした。それは二人でよく遊

んだ小学校時代から始まり、中学を経て、進路が分かれた高校、大学を卒業し仕事を始め今に至るまでを、のろのろと、虫が這うように長い時間をかけて話した。

「会社に、マイマイカブリみたいな上司が居てね」

「カタツムリ食うやつか」

「こっちが殻にこもっても、入ってくるんだ。そんなこと初めてだったから、怖くてね。見た目も何か似てるし」

「ほおー」

「殻の中まで入って来られると、逆に逃げ場がないってことも、初めて知った」

背中手に手をやり、殻をさすりながら彼は言った。私はそんな彼を眺めながら、ふと沸いてきた言葉を、二十数年前のあの日と同じように、そのままぶつけた。

「その殻ってさ、取らないのか」

私の言葉に彼は一瞬目を瞬かせ、一度口を開きかけて、閉じた。目を瞑り俯きじつと黙っている。

る。ただ、殻にこもってはいいない。

その内、彼が目を開き顔を上げた。

「この殻取ったらさ、君、要る？」

「死んでも要らん」

私の答えに、彼はにんまりと笑った。

それから数か月後、彼から、手術して背中の殻を取ったと連絡があった。『ナメクジになった気分はどうだ』と訊くと、『思ったほど悪くないね』と返ってきた。

さらにその後、彼は野菜を作っている親戚の手伝いを始めたそうだ。ある日メッセージと共に送られてきた画像には、彼の手のひらに乗ったカタツムリとナメクジが写っていて、『どうも、害虫です』と一言添えられていた。

誘い灯

須崎市 中山道雄

静かな川面に、オレンジ色の火の玉がいくつも浮かんでいる。頼りなく揺れながら、ゆっくりと川を上ってくる。夜の新莊川は、昼間より広く見える。暗い流れの中で、川漁師たちはツガニやテナガエビを追っている。あれは懐中電灯の光なのだ。

中学二年の夏休み。僕も毎夜のように川に来ていた。ゴム草履で浅瀬に踏み入れ、川底を電灯で照らす。

「おった！」

大きなツガニだ。爪が苔のような毛で覆われている。進路を阻むように手網を入れ、逃げるところを素早くすくい捕った。今夜は幸先がいい。

しかし、どうしたことか後が続かない。僕は

いったん河原に上がり、上流の橋を目指して歩き出した。

「坊主、はや、あきらめたがか」

振り向くと、こころで「ガニしげさん」と呼ばれている川漁師がいた。足元に竹籠が置いてある。ツガニが暴れるガサガサという音が聞こえた。

「ガニしげが出たか。そりゃ、いかんわ。一匹捕れただけでも上等よ」

父は僕の話聞いて笑った。

「どこの人ぜ」

母が話に加わった。

「もとは須崎の町で土方をしよった男よ。今はこっちで古い家を借りて暮らしゆう。もう五十になるろうか」

「家族も一緒かよ」

「一人きりよ。前に女房がおったけど、病気で死なれたがやと」

父はコップの酒を飲みほした。テレビのプロ野球を見ている。だれかがホームランを打ち、歓声

が響いた。

お盆が近づいた日、僕はまた川漁師に出会った。昼間に新莊川沿いの道を歩いていたら、しげさんが自転車を止めて休んでいたのだ。

「ガニが出る夜は、天気や気温、水の状態で分かる。ガニの動きが読めさえしたら、後は捕り放題やき」

しげさんは川漁の自慢話をした。

「ほいたら、今晚は捕れるろうか」

僕が聞くと、少し口ごもった。

「まあ、お盆が過ぎるまではやめちよきや。この

時期の川はおとろしいきね」

「何が怖いがぜ」

「死んだ者が戻ってくるき」

しげさんが続けた。

「この土地で死んだ者は、川を流れてあの世に行くがよ。お盆になったら、今度は流れを遡ってもんで来る。そんな時に川で遊びよったら、どこぞに連れて行かれるろうが」

「そんながは、ただの迷信やろ」

しげさんは、川に目をやった。

「去年のことやけんど、不思議なことがあったがよ。ちょうど今ごろの夜やった。ガニ捕りに行った河原に、十人ばあの人が集まっちゃった。若い娘から年寄りまで、みんなあがきれいな浴衣を着て、川を眺めよった。おんちゃんは夕涼みに来た近所の人やと思うたき、あいさつしたがよ」

「ほいたら、どうなった」

「みんな黙ったままで、こっちに顔も向けん。おれもぞうくそ悪うなつて、そのまま帰りかけたがじゃ」

しげさんは、たばこの箱から一本抜き出した。マッチをする手が、かすかに震えている。

「すぐに、おかしいと気づいたがよ。その日は夕方まで雨が降って、月も星も出ちよらんかった。けんど、河原におった人らあは、懐中電灯の光を当てちよらんに、顔の表情まではつきり見えたがやき」

しげさんは、それだけ話すと、小さなため息をついた。

「その人らあ、幽霊やったがかえ」

「分からん。けんど、朝になって同じ場所に行つてみたら、おんちゃん足跡しか残つてなかつた」

しげさんが、たばこを捨てて自転車に乗った。空に入道雲が伸び上がる。川は強烈な夏の光に満ちていた。

山里のお盆は、都会に出た人たちが戻つて来て、少しだけにぎやかになる。僕が通う小中学校の運動場では、三夜連続の盆踊りがあった。

会場で見かけたしげさんは、酔っているのが一目で分かった。まともに歩けないし、視線も定まらない。運動場の隅まで行くと、鉄棒の柱にもたれて、へたり込んだ。

「盆踊りか。ええ身分やねや」

突然、大きな声を張り上げた。

「おれらあ、盆踊りどころじゃないがぞ。おまんらみたいに田んぼも畑もない貧乏人やき、川で稼がんと食べていけん。どういて、やれるや」

焼酎の三合瓶をあおる。だれかにからむような

独り言が、延々と続く。こぼれた酒がズボンを濡らした。

盆踊りの世話役をしている大人たちが、しげさんを取り巻いた。

「ばぶれるがも、ええかげんにしいや。みんなあが迷惑するろうが」

しげさんは、抱きかかえられるようにして立ち上がった。腕を支えられ、校門から出ていく。

年配の男が、その背中に不愉快そうな言葉を投げつけた。

「近頃は分からんなるまで飲みゆう。自分くの家の前の道路で寝よつたこともある。なんぼ精だいてガニを捕つたち、酒代で消えよらあ」

「けんど、しげさんも前は真面目な人やつたきねえ」

浴衣姿の中年の女が口をはさんだ。

「奥さんがおつた時には、工事現場で一生懸命に働きよつた。夫婦は子どもがおらんかつたき、いつつも一緒におつたがよ。そればあ、惚れ合つちよつたということよねえ」

「奥さんは病氣やったかね」

別の女が尋ねた。

「若いころから心臓が悪かったが。きれいで優しい人やったけど、三年前の夏に、家で倒れたがよ。すぐに救急車を呼んだけど、いかんかった。それからよ。あの人が酒にのまされたがは」

「ほんでも、酔狂はいかん」

消防団の男が、近くにいた僕に声をかけた。

「おまんも、あんな酒飲みになつたらいかんぜ。川漁師いうたち、ただのアル中みたいなもんじゃき」

僕は翌日の夜も、盆踊りに出かけた。帰りに「学校橋」と呼ばれるコンクリート橋まで来ると、しげさんが欄干にもたれて座っていた。

「おんちゃん。何しゆうがぜ」

「何もしらん。どこっちゃあ行く所がないき、川を見に来ただけよ」

「けんども、お盆の川は怖いのがよ」

暗い中でも、しげさんが苦笑するのが分かった。

「そうじゃった。けんども、一人でおるがも、こじゃんと怖いぜよ。おまんも、大きくなつたら分かる。もう遅いき、はよう帰りや」

「おんちゃんは、いなんがかよ」

「お盆も今日で終わりやる。そのうち眠とうなるまで、ここにおるわ」

橋の上に、しげさんの影がぼつんと取り残された。影は川を向いたきり、動かなかつた。

しげさんの遺体が見つかつたのは、翌日の昼過ぎだった。学校橋の下流で、河原に流れ着いてたところを近所の人が見つけたのだ。

新聞には、一人で川漁に出たしげさんが誤って深みにはまり、水死したらしいと書いてあった。

僕は納得できなかつた。しげさんは酔つていなかったし、ガニ捕りの道具も持っていなかつた。あれから川に入ったとは、とても思えない。

僕はこの想像をした。もしかしたら、しげさんはあの夜、死んだ奥さんを待っていたのではないかと。

お盆が終わると、死者はあの世に帰っていく。

奥さんが橋の上に現れて「一緒に行こう」と誘ったら、しげさんは拒めただろうか。どこにも行き場のない川漁師は、自ら死を選んだのかもしれない。

夏休み最後の夜、学校橋で子ども会のささやかな花火大会があった。小学生や幼児が花火を持たせてもらい、欄干に沿って並ぶ。青や赤の炎が川面を染めた。

ふと上流に目をやると、遠くにオレンジ色の火の玉が見えた。大人たちは「ガニしげが死んでから、ツガニが増えた」と冗談を言う。今夜も、だれかが川漁に出たのだろう。

「おい坊主、ガニは捕れたか」

ほんやり花火を眺めていた僕は、不意にしげさんの声を聞いた。火の玉はいつの間にか橋をくぐり、川を下っていく。新莊川は暗く、どこまでものびる道のように続く。僕はいつまでも、光の航跡を見つめていた。

詩

骨

高知市
甫
木
恵
美

のど仏からせき払い
最初のひとことを
聞きのがすまい

肉体を失くした
骨が語る

ことばにならないもの

この期キに及んでも

言いたいことは

きつとあるに違いない

特別な部屋の中の

特別な空間

止まったかのような特別な時間

骨から発する熱と

空気と息と声と

混じりあう

宙に浮いた骨が

ぶかぶか　ぶかぶか

それらもみんなていねいに拾う

畏れず

心して

いのちを拾う

一瞬

うつすらと

笑えみがこぼれたように見えた

やさしい残像

誠実な骨

子の宮は

香南市
町
猫

もうすでに産めはしない年齢になっても
時折思い出したように声をあげる
毎月くる痛みに耐えた歳月の意味もなく
有する機能を使わなかった負い目か
果たしてそれは誰に對しての
政治家が女性を産む機械のように押揄しても
お子さんとは訊かれ いないと答え
ごめんなさいと返されても
女として半人前扱いされたことももう時効
鍋にかけた汁をぐつぐつ泡だてる
種火は消えた

女が女であるということの意味や価値

その秤はかりはそれぞれ違ってはいても

本音と建前は同じ顔をして

皮一枚の下でせめぎあう

ここに在ると疼うずかなくてもいいのに疼く

その存在を忘れないでと主張するかのように

子の宮は

女子ばかりのラインの会話のなかで

独身の彼女は子宮の無駄遣いだから

と笑いながら自虐する

その言葉は幾年ものゆらぎの堆積の産物

子どもものいる友は何も言わない

多様性の時代だという

そんな言葉をお題目にしても

人類のDNAにすりこまれた性は

女を自由にはしてくれない

産めなかった 産まなかった

産みたかった 産みたくなかった

産めばよかった 産まなくてよかった

産む性をあてがわれた女は

子の宮を備えし者は自分に訊く
出会えたいのちを想像して震える分身に
これでよかったのよと抱きしめる
変えることのできないかけがえない今がある
在ることを時折静かに主張する子の宮を
なだめるようにわたしはあやす

父の涙

われは 本当の戦争を知らない
われは 本当の戦争を知らずに生きてきた
戦後は終わったという時代を生きている

あれは 何も知らない小さい時
終戦記念日だったか
父さんと戦争報道番組を見ていた
ブラウン管の中の人々が
戦時中の辛かったこと
怖かったこと 残酷だったこと
出来事をこんこんと語っていた

「そんなに辛かったんなら早く忘れたら

香南市 青野 紀代美

ええんよ」と幼い私が言った

「忘れることができんくらい 辛いこと

じゃったんや 忘れれるもんじゃない」

と 声を荒げ父さんが泣いた

何も知らない小さい時

そんなことで泣いている

泣いている父さんが不思議だった

戦争は終わっていない

戦争は終わらない

戦争は続いている

父さん

何が辛かったの 何も聞かないまま

あの時の父さんの年齢を大きく過ぎた今

知らないことの怖さを今知る

知らなければいけない戦いを

語り継がなければいけない戦いを知る

あの時の父さんの涙

あの時の父さんの涙の意味

心からごめんなさいと手を合わせる

弓

高知商業高等学校三年 濱 口 陽 仁

静けさが耳にふれる

とん、と足が床を踏む音だけが

自分の居場所を教えてくれる

胴造り

弓がまえ

ゆっくりゆっくり

身体と心が呼吸を合わせる

「矢を放つんじゃないき。心を解き放つがよ」

先生の言葉が蘇る

会

時間が止まっているようだ

音も色も消え

的と自分しか存在しない

離れ

静けさの中に

一本の風が生まれ

的に中る音よりも

矢が飛び立ったときの

心の音がいちばん強く響いた

忠実

高知市
山田草花

「もう死にや」

と、喘ぐ犬の前足を握り

もう片方の手では頭をさすりながら

つぶやいた直後

長い息を吐いて事切れた
リュウ

私がそれを言わなければ

今でもリュウは傍にいただろうか

犬という種の寿命を超えて

この先 何十年も

湿った鼻を寄せただろうか

愛らしい垂れ耳の雑種犬
色づき 今にも落ちる葉のように
美しい 赤褐色の被毛

連れ添い歩いた公園の木々は
今年もリュウの毛色に染まつている
そのうち 無垢の愛が積もるように
地面を覆いつくすだろう

いつか私が
人という種の寿命を超えず
枯れて地上へ落ちるとき
自分の言葉を浮かべながら
リュウの最期をなぞるだろう

控え目にゆれる紅葉色の耳に
乾いた土のような前足の感触
秋の陽光に似た額のぬくもり
地表で色を失う落葉
帳とともに下がりゆく気温

冬に向け一斉に枯れる花の潔さ
こちらを見つめる
どこまでも穏やかなまなざし

そして、命への忠実さを

八十年

吾川郡いの町
西原時子

見上げると
父と母は空にいた
兄ちゃんは追いかけて行った
私もと伸ばす手を
じいちゃんとはあちゃんは
体ごと抱きしめてくれた
行っつてはいかんぞ
わしらと暮らそう
あれから八十年
ずっと見守られて生きてきた
みんな

空へ行つてしまった

墓さまはずらり並んで村を見る

私をそつと見てくれる

それじゃのに

この坂道はもう登れない

杖をついてもたどれない

水も櫛も花も御供え物も

もうもう届けられない

どうしよう 墓さま

八十年たつて私は泣き言ばかり

飢えた時に掘れと言われた彼岸花

炎のように咲いている

思いの先 墓さまよ

村には大人といっぱいいた子供は

誰もおらんかった

戦死した家

ブラジルへ移民した家

都会へ子らを送り出した家

家は もう息をせんかった

墓さま 村を出て集団移転しようか

それとも

杉や桧に囲まれて

ずっとそこにいてくれるか

戦後八十年

そののちも

佳作五編

川漁師

二度目の結婚をした
二十三歳の時である
妊娠五ヶ月であった

四万十川のほとりの川漁師の家に嫁いだ
初冬のこと天然青海苔漁が始まっており
私も手伝わねばならなかった

会社勤めをしていた夫が
無理をさせたくない

四万十市

山

崎

詩

織

両親に話してくれたのだが
姑さんはとても厳しく
手伝うことを強いられた
縄にずらりと干された青海苔を
「手わき」と云って
ほぐして行くのが仕事である

西風と燦々と降り注ぐ陽射し
青海苔は濃い緑色に変わり
あらあらという間に乾くのである

夫の帰りはいつも遅く
両親と一緒に夕食を食べる
お肉は食べられずいつも魚であった
息が詰まりそうになる
夫さえ居てくれたらとおもう
おなかのこどもがびくびくと動き
真っ先に夫に報せたかった

やがて真冬になり雪が降る

青海苔は雪が降っていても干すのである

強く冷たい西風に煽られそれは乾いていく

何と不思議なことだろうと思った

どれほどの歳月が流れたことか

四十万川のほとりで

私はゆっくと歳を重ねている

カツオの詩

高知市 村西和貴

カツオは旨い 旨いぞカツオは

東京から高知に来て早半年

始まりはひろめ市場だった

赤々と燃える藁でモウモウと香ばしい煙をま

とったカツオ

飲み歩きの日々が始まった

分厚く切られたカツオはルビーのように赤く

輝いている

辛口の地酒がみるみるうちに消えていく

これまで俺にとってタタキはポン酢だった

だが塩タタキなるものの存在を知った

まさに世界がひっくり返るほどの旨さだった

野趣あふれるカツオの香りをニンニクが受け

止めて口の中で踊る

あとはもう、粗塩の食感と押し寄せる旨味だ

け

今度はメジカの時期が来るといふ

矢も楯もたまらず久礼まで車を走らせる

アーケードからはみ出さんばかりの行列

まるで白昼夢のような光景だ

ここにいるみんながカツオを食べに並んでい

るなんて

汗を噴き出させながら並んで待つ

頼む、どうか品切れになつてくれるなよ

あともう少しだ

おばちゃんの流れるように捌く手つき

すりおろされた仏手柑の鮮烈な香り

さあ、待望のメジカとご対面だ

思わず声が出た 弾むような食感

切なさを感じさせるかのごとく繊細な後味

大きさが魚の価値ではないのだ

俺はもう数バック買わなかったことをひどく

後悔した

何尾分のカツオを平らげたことであろうか

でもまったく飽きる兆しはない

今夜もまた、赤提灯に吸い寄せられていく

カツオは旨い 旨いぞカツオは

かけがえのない存在

高知商業高等学校二年

山下

凜

「行きたくないな」って思った朝も

学校につくと いつの間にか忘れて笑ってた

なんでもない会話

なんでもない時間

なのに 気づけば一日が過ぎていて

黒板のすみに書かれた

卒業までのカウントダウン

「まだ一年以上あるじゃん」って笑ったけど
心のどこかで「もうそれだけか」とも思った

めんどくさかった日々が
こんなにも愛おしいなんて
みんながいたからだ

ずっと こんな日々が続けばいい
ずっと 一緒にいられたらいい
そう思ってしまうくらいに

忘れたくない
忘れられないんだ

いつか

高知市
露
口
奈津子

またねとは
いつまでのこと
あの時のあんたは
振り向きもしないで
左の手を高々と上げて
振ったね
うしろ姿が 遠ざかって
角を曲って
もう見えないのに
私は胸の所で小さく手を振った
ずっと ずっと
あれからの年月は もう

数えるのは やめました
いつの頃からか……
色んな物語りを紡いできたわ
悦びも 苦しみも
知りすぎてしまったのに
まだ またねを信じている
手櫛で梳いた指に
白髪がくっついて
まるで 汚れた物のように
ゴミ箱に捨てる
嗚呼 もうすぐ誕生日がくる
そうだ 髪を染めよう
少し明るい色で
いつか を
もう少し 待つために

幸せの種を蒔いた

高知市 栗山文子

幸せの種を蒔いた みんなで蒔いた
秋ちゃんは

この一粒でお腹いっぱいになる種を蒔いた
お腹のすいたみんなに届くようにと

幸せの種を蒔いた みんなで蒔いた
笑美ちゃんは

見たら大笑いする花が咲く種を蒔いた
悲しいことを忘れるようにと

幸せの種を蒔いた みんなで蒔いた
幸生くんは

優しい言葉の種を蒔いた
悪口を言うのはもうやめないかと言いつつ

幸せの種を蒔こう みんなで蒔こう
乾いた土地 瘦せた土地

この種は何処でも芽が出る不思議な種

幸せの種を蒔いた みんなで蒔いた
種から双葉が出てどんどん大きくなった

正ちゃんの種は正直な花が咲いて

ちよつぴり硬い実が出来た

二つに割ってスプーンで掬って

みんなで食べた 甘くて酸っぱくて

世界に一つだけの正ちゃんの味

幸せの種を蒔こう みんなで蒔こう
ミミズがいっぱいいる土地に

短

歌

○高知県文芸賞一首

廃校の正面時計はいつ見ても授業開始の八時半指す

四万十市

尾

崎

清

○高知県文芸奨励賞五首

本当は家族が好きな十四歳素直になるのはちよつと先かな

中土佐町立久礼中学校二年

中

平

千

友

出征の祖父が植ゑたるスギ・ヒノキ蟬しぐれ成す森となりたり

須崎市

徳

永

逸

夫

写真には収まり切らぬ光かな手持ち花火と夏の星空

高知県立中村高等学校二年

武山 ななみ

記念樹の剪定をする棟梁の鼻のピアスの光りて五月

高岡郡津野町

松岡 恵子

涼風の市でみつけた芋のくき舌の記憶の母の煮びたし

高知市

小野 都子

○佳作六首

新聞に小さき幸を拾ひ読む歪みたること多き世なれば

高岡郡佐川町

細

木

圭

子

口答えそれで勝ったと思うなよ黙る強さをまだ知らぬくせに

香南市立赤岡中学校三年

福

井

羽

汰

夏終ふシャツに残夏の匂ひして抱き込むやうに取り込んでいく

高知市

濱

口

榮

子

幼き日叱ってくれた反抗期気づけなかった母の優しさ

高知県立高知丸の内高等学校三年

藤田莞爾

松葉杖にすがりバスへと歩みくる人を乗客静かに待ちぬ

香美市

古川安子

温暖化すすむ地球の片隅にペットボトルのラベルを剝がす

高岡郡四万十町

窪田詩都子

俳

句

○高知県文芸賞一句

風鈴やまだ目の薄き嬰^{やわ}とゐて

高知市

池

裕

美

○高知県文芸奨励賞五句

この米にどれ程の汗棚田這ふ

高知市

岡

林

知

世

子

星月夜絵本のなかのひとり旅

南国市

澤

村

正

彦

駄菓子屋に午後より唸る扇風機

高知市

大

野

充

彦

一握り採れば一菜夏蕨

高知市

和

田

和

子

早朝の百本シュート息白し

高知県立高知丸の内高等学校三年

吉

川

優

羽

○佳作十句

大人から子供に戻る帰省かな

高知市

尾

崎

光

洋

外出を控へて貝になる暑さ

高岡郡佐川町

浜

田

博

子

この里に生きて生かされ野紺菊

高知市

川

戸

右

京

雨音の激し林檎を煮る夕べ

四万十市

安

西

佐

和

水口を水路へ戻す豊の秋

高岡郡佐川町

片

岡

幸

枝

おのずから海となりゆく芒原

高岡郡津野町

松

岡

恵

子

エプロンの私が私いわし雲

高知市

谷

三

喜

今日もまた夕焼けに染まる参考書

中土佐町立久礼中学校三年

谷

岡

永

太

運動会走ると風がついてくる

土佐市立高岡第一小学校五年

矢

野

虹

恋

やっぱり王貫ろくがあるかぶと虫

土佐市立高岡第一小学校六年

和

田

縞

都

川

柳

○高知県文芸賞一句

遠雷が一閃うしろの正面は

吾川郡いの町

渡

邊

ゆかり

○高知県文芸奨励賞五句

石段のへこみ神輿が下りゆく

四万十市

高

橋

敦

子

リベラルな猫が居たなら連れ帰る

高岡郡四万十町

野

村

宏

目から落ちた鱗が貼ってある日誌

高知市

富士田

三

郎

ズームされ嘘は悲しい陰かげを持つ

高知市

大野

充

彦

人間を乾燥させる他人事

高知市

近

藤

真

奈

○佳作十句

つぎの世の空ともあかね色の空

高知市

ますだ

じゅんこ

門に顔認証のノウハウを

高知市

明神

永子

哀しみを微分積分やがて雨

高知市

大野

早苗

幸せへ届く脚立を貸しましよか

高岡郡四万十町

熊

谷

敏

郎

撃ち方やめタンポポを踏むべからず

高知市

西

崎

直

子

生も死も絵文字となれず雲はゆく

吾川郡いの町

岡

林

裕

子

A I の無限抱擁人の秋

高岡郡日高村

森

下

菊

心中のような二人の大昼寝

須崎市

徳

永

逸

夫

遠雷がぼくたちのことさがして

土佐市立高岡第一小学校五年

木

村

結

人

まよつてる青春するか勉強か

土佐市立高岡第一小学校六年

藤

田

華

帆

審 查 評

短編小説審査評

今年は十四歳から九十三歳までと幅広い年代の方から、四十二編の応募があった。小説は幾つからでも書き始められるし、幾つになっても続けられるということが実証されているようで、おなじく書く者としてうれしく思った。ジャンルも多岐にわたっており、それぞれの作者の意欲を感じられた。自分の想う世界を展開する。これは小説を書く醍醐味のひとつではないだろうか。

順位などつけがたいと苦悶しつつも論議を重ね、今回の入賞作が決まった。

・文芸賞 『美彌子の春』

ガラスケースに収められた美しい京人形の苦悩と喜びを描いた作品。最後まで飽きさせず、独自の世界観に引き込まれる。表現力は申し分なく、文章全体のリズム感もよかった。人形に心があつたならこんなふうに見えることもあるのかもしれないと妙に納得させられる、力のある作品だった。

作品を読ませてもらう折には作者の名前と年齢は伏せられた状態なもので、勝手に熟年層の書き手を想像していたところ、思わぬ若いひとであることに驚いた。この先、彼は書き手としてどこまで成長していくのか。楽しみだ。

・文芸奨励賞 『アイスクリンはいつだって尊い』

ビッグな映画を撮ると言って家を出た父と、しばらくぶ

りに会った娘、サトコ。その頃には自分も映画を撮るようになっていたサトコに、父はいきなり「俺を撮れ」と要求する。言われたとおり父にカメラを向けながら、日常の尊さを感じとるサトコの気持ちの動きが、読みやすい文章で丁寧に綴られていて好感がもてる。

・文芸奨励賞 『カタツムリとナメクジ』

背中にちいさな殻のある、幼なじみの友人。彼はその殻のなかに入れると言う。それは物理的にはなく精神的なもので、殻は、彼にとって心の避難場所のような役目を果たしている。その感覚が、読み手にもしつかり伝わる。

少年から成人に至るまでの心情の推移がなめらかで共感できるのは、彼らの会話が活かしているからか。独特のセンスという得難い才能を持っているな、と感じた。

・佳作 『誘い灯』

ガニしげ、と呼ばれる川漁師と中学生の「僕」との交流が、鮮明な情景描写で書かれた作品。先に逝ってしまった女房に呼ばれたように死んでしまうガニしげさんの最後に、しみりとしたものが残った。

これらの他にも数作候補に挙げられた作品はあった。小説の評価にはある程度の認知バイアスがかかる。今回受賞には至らなかつた方々も是非、諦めずに書き続けてほしいと願う。

(審査員——米沢朝子、若江克己、文責・片岡真)

詩 審 査 評

応募総数は二百三十五編。文芸賞は浦木恵美の「骨」である。全体を見渡したのち、いよいよ文芸賞を決めるという段になったとき、サラサラと水が流れるように、淀みなくこの作品に決まった。火葬場での厳かな時間の事が書かれている。骨上げでは、喉仏は最後に喪主が拾うのであるが、それまでの間、喉仏は不思議な存在感を示して、そこにある。肉体を失くした骨が語る、ことばにならない言葉を聞こうとする詩であるが、鍛錬を重ねた果てに辿り着いた、作者の淡彩な詩の境地といえようか。「いのちを拾う」という一行にこめられた作者の思いが、この詩を、詩たらしめている。

奨励賞、町猫「子の宮は」は、最も意見が交錯した。饒舌の詩であり、読む側を刺激し、翻弄し、掻き乱す。私事としての詩というよりも、社会的テーマを題材とした意欲作である。他者の詩を批評することの困難さに直面せざるを得なかった。青野紀代美「父の涙」は、本当の戦争を知る父と知らない娘との、立場の違う親子の長い矛盾を背景に、泣いていた父の年齢を超えた作者が、知らないことの怖さを悟り父に詫びるといふ、ドラマ性を帯びた詩である

が、同時に、現代においても続いている戦争を告発する詩である。濱口陽仁「弓」は、熱心に押す審査員がいた。一人の読者を捉えて離さないということは、得難いことである。飛翔する弓矢のように研ぎ澄まされた感性の、さらなる飛躍に期待する。山田草花「忠実」は、愛犬への哀惜が胸に迫ってくる。風景と一体化して生きていたリュウ。「もう死にや」とささ言わなければ、この先、何十年も湿った鼻を寄せただろうか、常軌を逸したような後悔の領域にまで作者の思いはつる。忠実に生きた愛犬との、無垢の愛につながれた人生詩である。西原時子「八十年」、この詩が醸しだしているものは、戦後八十年の、変容し衰退した村の実相である。空に行った父母兄を追いかけて行きたいと願った幼い作者を、祖父母が体ごと抱きしめて、一緒に暮らそうと護ってくれた個人史も織り込まれている。墓に続く坂道を、杖をついても登れなくなった作者の胸に去来するものが、読む者の心に静かにしみる。

佳作にも、四万十川のほとりに吹く風のような詩、気合とリズムの話芸の詩、気づきがあちこちにある詩、熾火のような恋心が切ない詩、メルヘン的な詩などよいものがあつた。

(審査員——林嗣夫、やまもとさいみ、文責・増田耕三)

短歌審査評

二百二人から四百八十五首の応募があった。九十歳から十一歳まで幅広い層から歌が寄せられた。新たな学校からの参加もあった。先生方のご協力に感謝します。

審査の結果、文芸賞一首、奨励賞五首、佳作六首を決定した。

文芸賞

母校の正面時計はいつ見ても授業開始の八時半指す

尾崎 清

授業開始の鐘の音が聞こえてくるようだ。嘗ては生徒の声や教室へ急ぐ騒めきも。過疎化の進む地方の光景の一点を捉え、印象深い。スマートフォンと申すということが言われているが、一首には静かな抗いをも読み取った。

文芸奨励賞

本当は家族が好きな十四歳素直になるのはちょっと先かな

中平 千友

自分をよく分っている。反省もしている。だが現実には素直になれないと言う現実を歌にした。素直そのものの一首に拍手。家族に見せたい。

出征の祖父が植ゑたるスギ・ヒノキ蟬しぐれ成す森と
なりたり

徳永 逸夫

戦争に行った祖父への想いがこもる。スギ・ヒノキが森

となる歳月。先の大戦の悲惨な体験から非戦の憲法ができ、平和を保ってきたが、今やそれも危うい状況。蟬しぐれは警告とも聞こえる。

写真には収まり切らぬ光かな手持ち花火と夏の星空

武山ななみ

最近が良い場面をスマホで写真に撮ることが盛んだが、作者は上句でこれは収まらないと。光の美しさを感じ入る作者。結句で遙かな星空へ読者を誘う。

記念樹の剪定をする棟梁の鼻のピアスの光りて五月

松岡 恵子

棟梁の姿が鮮明。現代を象徴するようであり注目した。そして笑いも湧いた。初句の「記念樹」を想像する。五月の明るさが満ちている一首。

涼風の市でみつけた芋のくき舌の記憶の母の煮びたし

小野 都子

芋の茎が出回る季節には思い出が蘇る。下句の「舌の記憶」が独自で効いている。初句の爽やかさと母への思いがそこはかと伝わる一首。

佳作

細木圭子、福井羽汰（赤岡中）、濱口榮子、

藤田莞爾（丸の内高）、古川安子、窪田詩都子

（審査員——田上悦子、山脇志津、文責・梶田順子）

俳句審査評

本年度は十歳から九十七歳まで二百四十二名、八百七十四句の応募があった。昨年と比べて十名減ったものの、作品は一割増であった。

例年と同様に二十代から五十代の応募が少ないのは寂しい限りだが、日々懸命に働き社会を支えている彼らが、後年俳句という短詩に出会い、若き日を振り返りつつ日常を詠んでくれることを願ってやまない。

文芸賞

風鈴やまだ目の薄き嬰ごやとゐて

池 裕美

お七夜を済ませたばかりの赤子が眠っている。作者のお孫さんであるうか。若き日の回想であろうか。軒先の風鈴が小さな風でちりんとう鳴った。それはこの世に生まれた命を慈しむ涼やかな音である。季語の「風鈴」は適格な斡旋。品の良い佳句となった。

文芸奨励賞

この米にどれ程の汗棚田這ふ

岡林 知世子

今年ほど米や農政について話題になった年はなかった。その点からも今年を象徴する作品と言えよう。米作りにどれほどの手間と時間がかかるのか、また天候だけでなく政治にも左右される現実を改めて思い知らされた。「汗」あればこそその一粒なのである。

星月夜絵本のなかのひとり旅

澤村 正彦

絵本に限らず「本」の中では誰もが旅をし、違う自分になれる。それが星月夜ならば殊更に夢のある旅となるだろう。宮沢賢治の童話を想起させ、作者の童心が心地よく詠まれた。

駄菓子屋に午後より唸る扇風機

大野 充彦

昭和の頃にはどこの町にも駄菓子屋があり、学校帰りの子ども達で賑わったものだ。今でも郡部には少し残っていると聞く。ぶんぶん唸るように回っている扇風機もかなりの年代物だ。一読「あの頃は良かったなあ」と思わせる作品である。

一握り採れば一葉夏蕨

和田 和子

土佐の山里では春から初夏にかけて様々な山菜が採れる。筍を掘るのは難儀だが、蕨、虎杖なら女性や高齢者でも簡単に採れる。作者は欲張らず、一握りを持ち帰って夕餉の一品とした。慎ましい暮らしと共「足るを知る」心が美しく詠まれた。

早朝の百本シート息白し

吉川 優羽

朝練のサッカー少年を上手く描いた。季語の「息白し」がピタリとはまり、冬の朝のぴんとした空気感が伝わる青春賛歌である。

※審査員よりお願い

俳句は五七五の間を空けず、一行でお書き下さい。

(審査員——伊野部哲也、植田紀子、文責・田村乙女)

川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は五百八十五句で、応募総数は昨年を上回った。百四十八人からの応募をいただき、年齢は小学一年生の七歳から八十九歳までだった。応募方法が今年から変わったので心配していたが、全体には混乱はなかった。今年の応募作品は粒ぞろいで、日常のスケッチのような作品からどうしても想いを伝えたい激しい表現まで、川柳の特徴である幅広い作品の応募をいただいた。

今年もジュニアの応募がたくさんあり、小学生、中学生、高校生のどきっとする表現が目にとまった。審査の結果、次のように受賞作を決めた。

文芸賞は次の一句。

遠雷が一閃うしろの正面は

渡邊 ゆかり

思いもかけない稲光がした。一瞬たじろいでしまう。時間差があつて、雷鳴がとどろく。光を感じて緊張恐怖の中、後ろの正面に守るべきものがあつたのかもしれない。私は私のことしか考えていなかった。災害の時も、事故の場面もそうだろう、一瞬で私の思考も行動も止まってしまふ。私でさえ私でなくなる。私のうしろになど思いも及ばない。「遠雷が一閃」「うしろの正面」の取り合わせが絶妙で、こころの動きを表現した秀逸な句。

次に、文芸奨励賞。

石段のへこみ神輿が下りゆく

高橋 敦子

由緒ある神社の秋まつり。神輿が石段を下りてゆく。神輿を担ぐ人の足元の石段のへこみに歴史を感じる。何百年

と祭りが続いてきただろうが、神輿を担ぐ若者が減ってきた。いつまで祭りは続けられるか、石段のへこみに見る歲月との対比が鋭い。

リベラルな猫が居たなら連れ帰る

野村 宏

アメリカの現状を見ると、リベラルは死語になりそう。日本も若者は保守化していると言われる。私が目指してきたりベラルな社会を共有できる猫なら連れ帰ってあげるとの表現は楽しい。リベラルを語り合える仲間が欲しい日常が続く。

目から落ちた鱗が貼ってある日誌

富士田 三郎

日々の生活に、真新しいことを感じたらどんなに刺激的だろう。感性が衰えなければ、どんなに年齢を重ねても「目から鱗」のような出来事はあるはずだ。一日に一つでいい、日誌に驚きを書きたい。ベテランのさすがと思わせる作品。

ズームされ嘘は悲しい陰を持つ

大野 充彦

さらっと会話の中で流される嘘は、話しを面白くしてそれはそれでいい。ちよつとした嘘に注目が集まると、嘘の背後の人間の持つ悲しさがのぞいてくる。最初は小さな嘘が世間を騒がす。「あれは嘘でした」と言えないと、悲しさが何倍にもなる。

人間を乾燥させる他人事

近藤 真奈

他人事だと思われると、力のある言葉は返ってこない。いのちにかかわる話しても、医療者が自分事としての丁寧な話にならないとがっかりする。自分のこととして考えてくれる、共感性の高い人と話すとはっとする。

(審査員——清水かおり、山岡陸宏、文責・小笠原望)

令和七年度高知県文芸賞 作品募集要項

一、趣 旨

高知県文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

二、主 催

高知県・（公財）高知県文化財団

三、主 管

高知県芸術祭実行委員会
（事務局（公財）高知県文化財団内）

四、公募作品の部門

短編小説	一人一編
詩	一人一編
短 歌	一人三首以内
俳 句	一人五句以内
川 柳	一人五句以内

五、応募条件

未発表作品であること。応募者は高知県在住者に限り
ます。

*私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回

覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

*入選作品集、SNS（高知県芸術祭）等に入選作品を掲載することについて許可をいただくことを条件とします。

*生成AI（人工知能）を用いて作った作品の応募はできません。

*その他、上記の条件等に則り、事務局が判断する場合がありますのでご了承ください。

六、応募にあたっての注意事項

*類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関する問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

*二重投稿はご遠慮ください。

*応募後の内容変更は受け付けません。

七、応募作品への記載方法・注意事項

【各部門共通】

- ①部門名
- ②氏名（フリガナ）※ペンネームご使用の場合は併記
- ③郵便番号・住所
- ④電話番号
- ⑤年齢（令和七年九月三十日現在）

を必ず明記してください。

* 記載場所等は部門ごとに異なります。

* 鉛筆又はシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはつきり書いてください。

【部門別】

応募用紙は高知県芸術祭ホームページからダウンロードできます。

応募用紙を使用されない場合は、下記の要領で作成してください。

なお、メールで応募される場合は、必ずダウンロードした応募用紙を使用してください。

〈短編小説〉

・ 作品本文は四百字詰原稿用紙十枚。

・ パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。

・ 必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要です。

・ 記載内容

一枚目

タイトル

二枚目～十一枚目

作品本文

十二枚目

部門名・氏名・郵便番号・住所・電話番号・年齢

〈詩〉

・ 作品本編は四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・ パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。

・ 記載内容

一枚目

一行目上方に部門・作品名

二行目下方に氏名

三行目空欄（ペンネーム使用の場合は記載）

四行目から作品本文を書き始めてください。

三枚目 郵便番号・住所・電話番号・年齢

〈短歌・俳句・川柳〉

・ 通常はがきを使用してください。

※ 学校でまとめて応募する場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。

その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・ はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・ 氏名・郵便番号・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

* 応募作品は返却しません。

* 個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名を公表します。

八、応募方法・応募先

郵送、持参又はメールで応募してください。

郵送等…〒七八一八二二三 高知市高須三三三二一

(公財) 高知県文化財団

メール：k_geiyutsu-sai@kochi-bunkazaidan.or.jp

九、応募締切日

令和七年九月三十日(火)消印有効(※持参・メール

の場合は当日必着)

十、発 表

*入選者名は十一月上旬に、高知新聞・高知県芸術祭公

式ホームページ上で発表予定です。

*入選者には別途通知します。

*入選作品は「高知県文芸賞入選作品集」(十二月上旬

発行予定)、高知県芸術祭公式ホームページ等に掲載

します。

*表彰式は令和七年十二月七日(日)に高知県立文学館

ホールで行います。

十一、選 賞

・短編小説「高知県文芸賞」

「高知県文芸奨励賞」

・他の部門「高知県文芸賞」

「高知県文芸奨励賞」

表彰状と副賞が授与されます。その他、佳作が選出さ

一名
二名
一名
五名

れる場合もあります。

十二、審 査 員(敬称略・五十音順)

短編小説…片岡 真 米沢 朝子 若江 克己

詩 …林 嗣夫 増田 耕三 やまのさけいみ

短 歌…梶田 順子 田上 悦子 山脇 志津

俳 句…伊野部哲也 植田 紀子 田村 乙女

川 柳…小笠原 望 清水かおり 山岡 陸宏

十三、問い合わせ先

〒七八一八二二三 高知市高須三三三二一

(公財) 高知県文化財団

メール：k_geiyutsu-sai@kochi-bunkazaidan.or.jp

TEL：〇八八八六六一八〇三 FAX：〇八八八六六一八〇〇八

(平日九時～十七時)

二〇二五年十二月七日 発行

編集発行 高知県芸術祭執行委員会

事務局 高知市高須三三三二一

(公財)高知県文化財団内

印刷所 高知市城山町三六

西 富 騰 写 堂

(非 売 品)

